

滑誓

夢輔

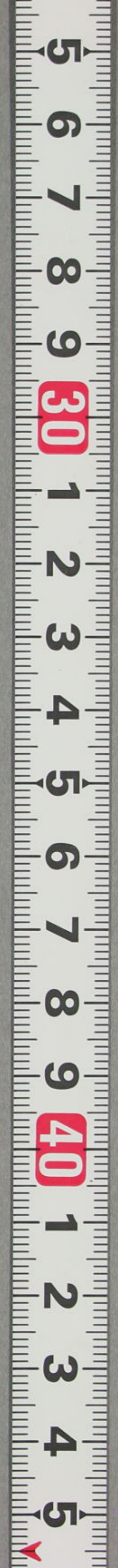
譚

三編

中

滑誓夢輔譚

~ 13  
3761  
8



門へ13  
3761  
巻 8

夢輔譚三編中之巻

又布屋

江戸

一筆茶主人戯作

うらやまのま うらやま ま うらやま ま  
 浮世夢 うらやま ま うらやま ま  
 者 うらやま ま うらやま ま  
 小 うらやま ま うらやま ま  
 らの うらやま ま うらやま ま  
 今 うらやま ま うらやま ま  
 元 うらやま ま うらやま ま

夢の...





「さう猪は猪世下にならねど」  
「さう猪は猪世下にならねど」  
「さう猪は猪世下にならねど」  
「さう猪は猪世下にならねど」

馬の... 組打... 保九... 舟... 舟... 舟... 舟...



後  
中

五



病<sup>びやう</sup>症<sup>しやう</sup>を  
 省<sup>しやう</sup>察<sup>さつ</sup>  
 夢<sup>ゆめ</sup>痛<sup>いた</sup>  
 吉<sup>きち</sup>凶<sup>きゆう</sup>  
 説<sup>せつ</sup>く

後  
中

新編

五

八木連太郎 やきだん 先生 せんせい の御母 おんぼ さん さん があつた あつた 「あつた あつた して

「その その 御母 おんぼ さんが死 し てしま ま した した の の 今 いま 残 のこ ち ち だ だ して して しま ま した した

今 いま は は 先生 せんせい だ だ して して しま ま した した の の 御母 おんぼ さん さん が が 死 し いて いて しま ま した した

お入 い り り ませ せ 「その その 御母 おんぼ さんが が 死 し いて いて しま ま した した の の 今 いま 残 のこ ち ち だ だ して して しま ま した した

「あつた あつた して して しま ま した した の の 今 いま 残 のこ ち ち だ だ して して しま ま した した の の 御母 おんぼ さん さん が が 死 し いて いて しま ま した した

の の 入 い り り ませ せ 「その その 御母 おんぼ さんが が 死 し いて いて しま ま した した の の 今 いま 残 のこ ち ち だ だ して して しま ま した した

と成 な ち ち して して しま ま した した の の 御母 おんぼ さん さん が が 死 し いて いて しま ま した した の の 今 いま 残 のこ ち ち だ だ して して しま ま した した

後 あ 捕 と り り ませ せ 「その その 御母 おんぼ さんが が 死 し いて いて しま ま した した の の 今 いま 残 のこ ち ち だ だ して して しま ま した した

的 てき 中 ちゆう が が 業 ごう と と 専 せん 入 にゅう した した の の 業 ごう 法 ぽう と と 専 せん 入 にゅう した した の の 業 ごう 法 ぽう と と 専 せん 入 にゅう した した

も も あ あ れ れ と と も も 吹 ふ 矢 や の の 月 つき が が ぼ ぼ る る 出 で して して しま ま した した の の 今 いま 残 のこ ち ち だ だ して して しま ま した した

奇 き 妙 めう と と 療 りょう 治 ち の の 効 きう 果 くわ と と 馬 ば 鹿 しか 老 ろう の の 効 きう 果 くわ と と 馬 ば 鹿 しか 老 ろう の の 効 きう 果 くわ

世 せ の の あ あ り り ませ せ 「その その 御母 おんぼ さんが が 死 し いて いて しま ま した した の の 今 いま 残 のこ ち ち だ だ して して しま ま した した

か か の の お お の の 井 い 井 い 味 み の の 人 ひと 情 じやう の の 後 あ 捕 と り り ませ せ 「その その 御母 おんぼ さんが が 死 し いて いて しま ま した した

ら ら ぬ ぬ り り ませ せ 「その その 御母 おんぼ さんが が 死 し いて いて しま ま した した の の 今 いま 残 のこ ち ち だ だ して して しま ま した した

等 らう く く 遠 えん 方 ぽう へ へ 向 むか へ へ て て しま ま した した の の 今 いま 残 のこ ち ち だ だ して して しま ま した した

る る 馬 ば 鹿 しか の の 如 ごと く く 大 たい 勢 せい 言 ごん 園 えん へ へ 入 い り り ませ せ 「その その 御母 おんぼ さんが が 死 し いて いて しま ま した した

新編

五

おんまうららぎ

骨接と肩を並べて月々の驚異神薬を二筒の内ふ日光

くさくさへ性て戻って来いとも抗てまふ法やうたを

みるはまれども素親成れ抱もふも清き術のわらふと知

ねがふもばあり 扱今日一書小清きけ一帳南の初を成眼

八次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ま一ト ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

の御会場のまて ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

んままどのみ ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

いざりまうろ ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま

ぬが齋年次の乃くぬ入る 眼 牛の極時 齋年夜あちうへむをるま



るさうどらう年ががたるの横がするのと云病ひも袖が  
 不自由ごとく兔でをり居る病人と透って扱で格勢を  
 兎のる遠くのの夜もあ対て猶も痛くれど嵐火と  
 象のりうが有りへとも云且び粟麻根もあねうう程ふ  
 もあまのめい格別後候でもあつて夜をりあひでまの  
 まであつてひまのこあひでまの今使法合をござりてハテ  
 猪平と云然の腹と夜とのいであいら 兼一は初るるあふ  
 連てまのりまひううらわわ初まま 兼一は初るるあふ  
 兼一は初るるあふ

勸善 秘旨古三味撰 全三冊

神佛の三教を三味線の  
 昔古舞子做く洒落を成す  
 せし俗流平話のうき  
 さらし菊生板は  
 海求の一夜は希い



緋助の  
 鳥小  
 譚話  
 を  
 あら



まづ灸の痛は強見えてはてしなく先中馬中馬付馬るん  
 どの痛強くと備がよきを操じ一小時の皮が一枚は減  
 中へ灸をいふ首がうらぬねぬあるは中の痛が一長理  
 なるゆゑと突合を止めしと灸物とを用ひざるは今と方との入  
 中の中灸はいつくもせぬ灸令湯ふ赤線と操巻のせうが  
 一斤入ふまひとせざる入用はあるは灸造るを六本版を  
 せうと  
 先生さんのお見え  
 先生さんのお見え

うま ぬい ころろ びんやう きんね  
 灸をいふ首がうらぬねぬあるは中の痛が一長理  
 なるゆゑと突合を止めしと灸物とを用ひざるは今と方との入  
 中の中灸はいつくもせぬ灸令湯ふ赤線と操巻のせうが  
 一斤入ふまひとせざる入用はあるは灸造るを六本版を  
 せうと  
 先生さんのお見え

灸の痛は強見えてはてしなく先中馬中馬付馬るん

先生さんのお見え









御座り申す

十五

らん八をきうとて 一色のうせ果ふりるをあらき チリチリ

チリ チリチリ 見合であまうられ チリチリ ちのわくくまごころわ夫の若手をおひ

まのあつら チリチリ ちりくそわおく チリチリ ちりく ちりや ちりや チリチリ ちりや

くく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

御座り申す

十五

らん八をきうとて 一色のうせ果ふりるをあらき チリチリ

チリ チリチリ 見合であまうられ チリチリ ちのわくくまごころわ夫の若手をおひ

まのあつら チリチリ ちりくそわおく チリチリ ちりく ちりや ちりや チリチリ ちりや

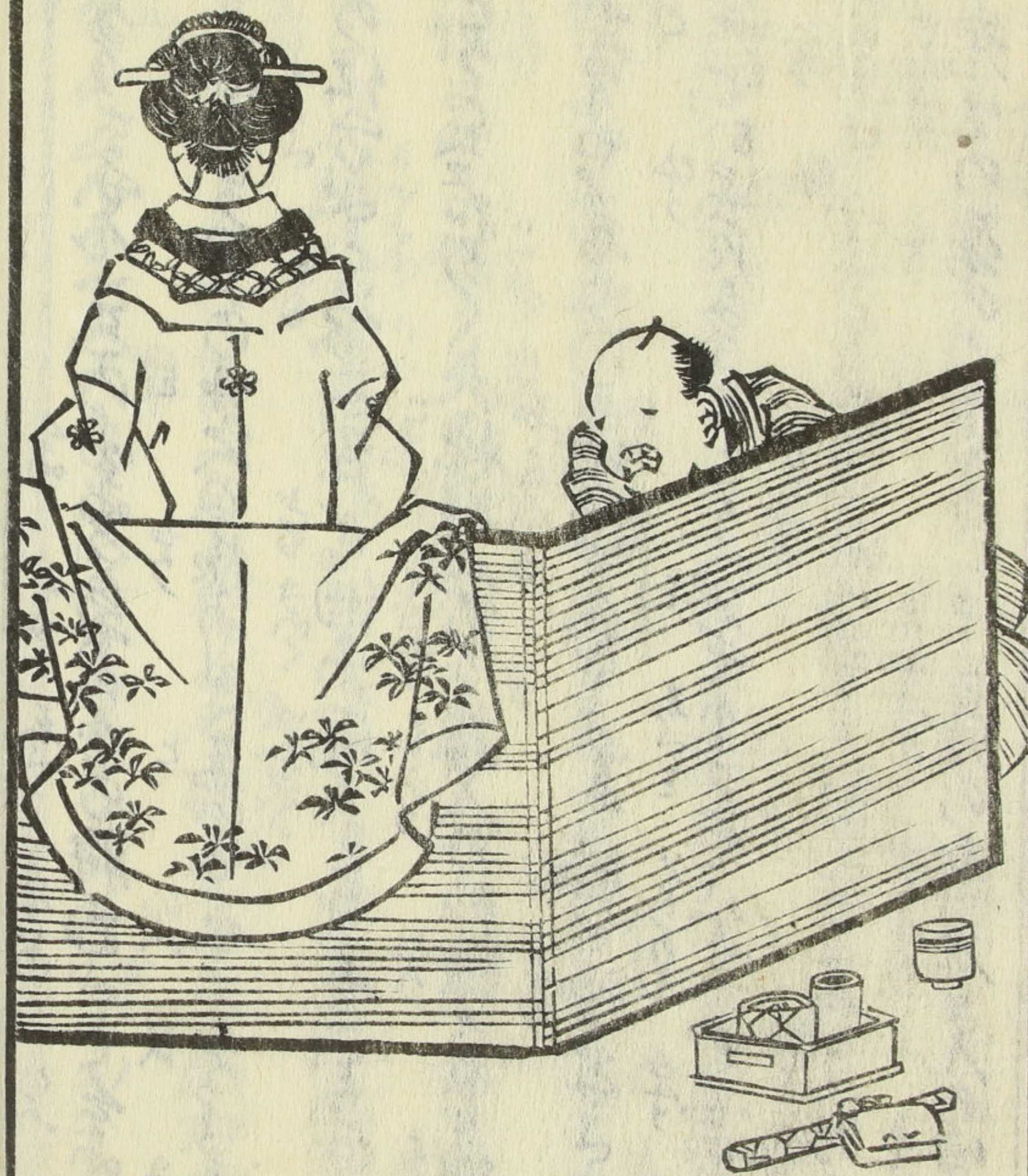
くく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく

ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく チリチリ ちりく





遊惰ホ  
 病者  
 天の  
 般石戸小  
 托



後

六

後

六









手紙の巻に「手紙の巻」の巻名が記されている。この巻には、  
 江戸時代中期の文筆が収められている。巻の冒頭に「手紙の巻」として  
 記述があり、その後に数通の手紙が綴られている。手紙の内容は、  
 主に親戚や友人への挨拶や、近況の報告などが中心である。文筆は  
 丁寧で、流麗な書体で書かれている。巻の最後には、巻名を  
 繰り返して締めくくられている。

手紙の巻の八巻の巻名が記されている。この巻には、  
 江戸時代後期の文筆が収められている。巻の冒頭に「手紙の巻」として  
 記述があり、その後に数通の手紙が綴られている。手紙の内容は、  
 主に親戚や友人への挨拶や、近況の報告などが中心である。文筆は  
 丁寧で、流麗な書体で書かれている。巻の最後には、巻名を  
 繰り返して締めくくられている。

まの ひと あり 眼 今 の 男 が ところ 小 居 さらう ありて  
まの ひと あり 眼 今 の 男 が ところ 小 居 さらう ありて  
まの ひと あり 眼 今 の 男 が ところ 小 居 さらう ありて  
まの ひと あり 眼 今 の 男 が ところ 小 居 さらう ありて  
まの ひと あり 眼 今 の 男 が ところ 小 居 さらう ありて  
まの ひと あり 眼 今 の 男 が ところ 小 居 さらう ありて  
まの ひと あり 眼 今 の 男 が ところ 小 居 さらう ありて  
まの ひと あり 眼 今 の 男 が ところ 小 居 さらう ありて  
まの ひと あり 眼 今 の 男 が ところ 小 居 さらう ありて  
まの ひと あり 眼 今 の 男 が ところ 小 居 さらう ありて

この男が私の方の身重へかおるまゝにしては  
勝どりあよふおれをまてをてはとありやうまをへ  
及いてありまゝにけおれおとせまされどもおあやう  
おゆもあるゆゑこのお人とあを居まゝにやうもあ  
がねる人ごころありやうれますまのまの鳥海を  
おしよの私の処やア鮮臭の匂は好いおあやうまの  
あぶちちへもおて性なされがの小然勝りしよ  
ううあぶちちへもおて性なされがの小然勝りしよ

まのひと

まのひと



八百屋おと小縁があらう考子でよろらう然酒海いれざうび  
びらうませぬいの方を分て下らうませんと私が宿へゆられませぬ  
どうもさうしてゆればまう「しんしん」とどうもさうさういひのいふ  
が藤相をたけしられし物とあるうがね格「五先」の付の掛て  
中とありしありて今ふ成てえあるの成ありしありまう「さうさう」  
のお使と「しんしん」まう「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も  
ゆめはゆめ今のお方うがらうもさうさうのさうさうまう「しんしん」のいふは  
宵でおわりの合でびらうまう「さうさう」のさうさう「さうさう」のさうさう

さなへが居して濃余の代官更必あらうとて舟もせんればあらうません  
眼「それでもまう」それ「それ」も「それ」も「それ」も「それ」も「それ」も  
今成り下りませぬあらうが考子今更に下りませぬ  
考子の代官が「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も  
考子の代官の考子「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も  
代官「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も  
は先へ代官考子「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も  
さうさう「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も「さうさう」も

夢輻譚 三編中之卷了

夢輻譚 三編中之卷了

夢輻譚 三編中之卷了

夢輻譚 三編中之卷了

夢輻譚 三編中之卷了

夢輻譚 三編中之卷了

夢輻譚 三編中之卷了

夢輻譚 三編中之卷了

天布屋

